

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 鷲 崎 早 雄

近年、情報通信技術の重要性が増すとともに、経済活動において情報産業が従来産業とどのような構造を持った係わり方をしているのかが、情報産業の特性を知る上で重要な点となりつつある。

本論文は、産業構造に対する技術的な関係（すなわち投入関係）を視点とする分析のうち、産業全体の技術的な序列関係の上において情報産業がどのように位置付けられるか、情報産業の活動が各産業の汎用的なインプット（ジェネラル・インプット）へ成長しているか、という問題に対して実証的な分析を行っている。また、そのような階層構造の分析に加えて、情報産業と他産業の誘発関係を分析して、情報産業の活動が他の非情報産業の活動への程度依存しているのかという問題や、2つの異なる産業連関表において相対する産業の投入パターンの差異を測定して、2つの異なる経済における産業ごとの投入構造の近さや遠さを知るという問題に対して、実証的な分析を行っている。

本論文は6章より成り、その概要は以下のとおりである。

第1章の序論は、本研究の背景と目的及び研究に対する問いについて述べ、問いに答えるための分析のフレームについて説明している。

第2章は、第3章以下で述べる分析の前提を説明している。ここでは、本研究が用いる情報産業の基礎的な定義について述べ、次いでその定義を具体的な産業連関表へ適用したときの産業分類を述べている。また、そのような産業分類を用いる場合の分析の限界について触れている。

第3章は、産業階層における情報産業の位置付けの問題を扱っている。この問題の考察は本論文の中心的なものである。本章は全体として3つに区分され

る。まず最初に、産業構造における序列性の存在と、その序列性の発見方法について先行研究を交えて考察をしている。序列性の発見方法は、三角化計算方法として先行研究を整理し、それを新しくアルゴリズムとしてまとめている。本章の2つめのポイントは、計算結果の提示である。三角化の結果、産業全体の中で情報産業は「上位」「中位」「下位」の3つの位置に重層的に位置付けられることが示されている。ここで「中位」に位置付けられる産業は主としてメディアやコンテンツを扱う産業であること、また「下位」に位置付けられる情報サービス産業、国内通信産業、企業内研究活動は、1980年と1995年を比較すると、初めから「下位」に在った訳ではなく、時間経過とともに「下位」へ移動してきたという事実が示されている。

本章の3つめのポイントは、計算結果が示す背景の考察である。ここでは、情報サービス産業が「下位」へ移動しているという事実が、情報サービス技術が汎用的な専門技術（GPT:General Purpose Technologies）であるという特性に伴う経済的現象であると推論している。

第4章では、情報産業をブロックの内部波及および外部波及という観点から分析している。情報産業の内部波及比率は金属産業など過去に研究されたものに比較して小さく、したがって情報産業の活動は他の非情報産業に依存していることが示されている。

第5章では、2枚の産業連関表を用いた場合の相対する産業の投入パターンの比較方法について考察し、それを日米国際産業連関表に適用した結果を示している。情報産業の大半はサービス産業であるが、そのうち金融や商業・運輸など一般サービス産業に比較して情報産業の日米差が大きく、米国の方が情報活動を多く投入する投入構造であると述べている。

第6章は、結論であり、結果を総括し、今後の課題と展望を示している。

以上のように、本論文は、リーディング産業として今後ますます重要性を増す情報産業について、産業連関表を用いた構造的な分析方法と、その分析方法を用いた1980年から1995年までの情報産業の構造的な変化の実証結果を示したものである。

本論文は、情報産業構造の分析について、先端経済工学の今後の発展に寄与することが大きいと判断される。よって、本論文は博士（学術）の学位請求論文として合格と認められる。